

悪霊 第三部・五月の紅い空

悪
霊

第
三
部
・
五
月
の
紅
い
空

【登場人物】

- 伊集院満枝……………H市の地主の娘
猪俣佐和子……………満枝の元クラスメイト。東京で左翼活動に従事
安西小百合……………伊集院満枝の一年後輩
佳代……………貧しい農家の娘
喜代美……………女工
小沼健吾……………労働運動家。伊集院家の元小作人
篠原ヨシ……………伊集院家の使用人
村野栄太郎……………党員。マルクス主義研究者
堀田弁護士……………満枝の法定後見人
川奈昭一郎……………満枝の元婚約者・昭三の父。川奈産業社長
白瀬朱鷺……………女相場師。料亭「扇屋」の女将
鎌田悟……………党員。東京支部第四地区長
増田喬……………小百合の兄の後輩

昭和五年（一九三〇）年三月～五月。東京市、北海道H市

IV

話は一時、北海道H市に戻る。

目抜き通りから横町に入った静かな一角に、「扇屋」という料亭が店を構えていた。

昼近く。店をあげるには、まだ間がある。

「いいね、買いだよ」

玄関に近い六畳の部屋の、ちゃぶ台にもたれながら、女将おかみの白瀬朱鷺しらせととみは、卓上電話機の送信機に向かって声を張り上げた。

「時期を逃しちゃいけないよ、あと、金に糸目はつけないからね」

そのまま電話を切り、灰皿に置いたシガレットを拾い上げ、ふかぶかと吸い込んだ。

年の頃は四十路よそじを一つ二つすぎたばかりか。ふつくらとした丸顔、小さな口元、愛嬌のある容姿だが、時に眼差しが鋭く光る。

「女将さん」

襖ふすまの向こうで、仲居の声がした。

「お見えになりましたよ」

「通しておくれ」

へい、と答えて、仲居の足音が遠ざかった。

「おじゃまいたします、先生」

やがて、襖をあけて入ってきたのは、伊集院満枝だった。

春らしく鮮やかな桜吹雪が描かれた派手な柄の着物に、金の刺繡をあしらった黒い羽織、厚めに塗った白粉に照り輝く口紅は、地主の令嬢ではなく、売れっ子の芸妓のようないでたちであった、

「よく来たね、ま、こっちにお座りよ」

ちゃぶ台には、すでに座布団が一枚、満枝のために用意されてある。満枝は一礼して部屋に入り、朱鷺と向かい合って座った。

「富田産業の株ですね……」

満枝は切り出した。

「あと数日のうちに暴落いたしますわ」

「そりゃ、確かなことかい？」

「わたくしが、確かでないことを申し上げたことがありますて？」

端然と微笑んで言う満枝に、朱鷺は再び受話器を取り上げた。ああ、あたし。富田産業の株、売りだよ。うん、急いでおくれ。

「で、何やらかしたんだい？」

電話を切って、朱鷺は訊ねた。満枝は答えた。

「今日あたり、富田産業の社長が、醜業窟で見つかりますわ」

「また、玉を潰したのかい？」

「ええ、そうなんですの」

「それだけかい？」

「まだあります。富田産業が軍に納めていた缶詰に、危険な薬物が混じっています」

「ほう……」

「これは、明後日くらいに発覚するでしょう」

「ふうん、どうやってそんな細工を？」

「職工を一人、買収いたしました」

「そいつも今頃、玉を潰されてどこかに埋められてるってわけか」

「は」

眉ひとつ動かさず答える満枝に、朱鷺は高らかに笑った。

「相変わらずやんちゃなお嬢さんだ。まあ、初めて会ったときから、とんでもないことやらかしてくれたもんね」

ちゃぶ台に身を乗り出し、顔を覗き込むようにして朱鷺は続けた。

「いきなり、あたしの情人を使い物にならなくしてくれたんだから」

伊集院満枝が、料亭「扇屋」に初めて姿を現したのは、一年前の初夏であった。

事前の約束もなく、不意に女将部屋に入ってきた時、白瀬朱鷺はちょうど、若い男と差し向かいで酒杯を重ねているところだった。

初めまして、伊集院満枝と申します。そう告げて頭を下げた満枝に、朱鷺は、不作法なお嬢さんだね、出直しておいで、と追い払おうとした。だが満枝は涼しい顔で、いいえ、帰るわけには

参りません、是非とも、弟子にしていたきたく存じます、と言いつつ放った。

弟子？ 朱鷺は眉を擧めた。

ええ、そのとおり。満枝は言った。

料亭「扇屋」の女将さんではなく、その世界では名の通った女相場師である貴女様に、ぜひ、御指南を仰ぎたいのです。

朱鷺は顔を強張らせ、男に目配せした。着流しの襟元から刺青がのぞく男は立ち上がり、満枝の前に立ちはだかった。

怪我したくないなら、ここは引き取ってくださいな。手荒な真似はしたくはねえ……。

男の言葉はそこで途切れた。満枝の手が、男の股間にのび、素早く動いた。辜丸を一捻りされた。男は白眼を剥き、口から泡を吹いて倒れ、動かなくなった。

何とぞ、お願いいたします。

倒れた男に見向きもせず、深々とお辞儀する満枝を、朱鷺はあつけにとられて見つめていたが、やがて口を開いた。

この家には、あと何人も荒くれがいる。あたしが手を叩けば、みんな集まってくるよ。そいつらみな、あなたの細腕で、玉を潰すつもりかい？

必要とあれば。満枝は微笑で答えた。朱鷺は思わず笑った。

いい度胸だ。ともかく、話をきこうじゃないか。

川奈産業は、北海道に駐屯する軍との取引を柱としている。主な取引の品は缶詰だった。北の

海で獲れるカニやニシンを加工し、軍の糧秣として納めるのである。

満枝が白瀬朱鷺を初めて訪ねたのは、川奈昭三との縁談話が持ち上がってから数日後であった。女相場師として莫大な富を築いただけでなく、裏社会にも精通している朱鷺に、満枝は言った。

川奈産業を買収したいのです。

「だってあなた、川奈の御曹司の嫁になるんじゃないやなかったのかい？」

訝しがる朱鷺に、満枝は答えた。

あの男の妻になるのは願ひ下げです。でも、川奈産業は欲しゅうございます。ただ、わたくしは、会社の経営とか、株式のこととか、何も存じません。だからこそ、貴女様の御指南を仰ぎたいのです。

「大胆なお嬢さんだねえ」

朱鷺は呆れつつも、出入りを許した。

以後、週に二、三日は訪れる満枝は、朱鷺の教えを、驚くほどの速さで吸収した。

会社を所有しているのは、その会社が発行する株を買った株主である。株を多く所有すればするほど、その会社の経営権を握ることができる。会社の最高意志決定会議である株主総会では、株の所有数に応じて議決権が与えられる。すなわち、過半数の株を握っていれば、会社は思いのままだ。

「つまり、あなたが川奈産業の株を過半数を買えばいいってわけさ。もつとも、そのためには、あなたの土地をどれだけ売らなきゃならないか、見当もつかないだろうけどね」

軍との取引で利益を得ている川奈産業は安定企業だ。大きく株価が下落することはありえない。

でも……、と満枝は訊ねた。

川奈産業の株価が下がれば、わたくしでも、株を買うことができるわけですね。相場師の方々は、株価を上げたり下げたりするために、いろんなことをなさるんでしょう？

株には別の側面がある。株価は、会社の業績や評判によって上下する。安い時に買い入れ、価値があがるのを待ち、再び暴落する直前に高く売りさばく。これを「売り抜け」と言う。相場師は、冷静に株式市場の動向を見定め、適切な売り買いをすることで儲けるのだ。

「そんな乱暴なことをする者もいるかもしれないけどね」

朱鷺はとぼけた。確かに、裏社会のコネを使って、あくどい手を使うことがないではないが、口が裂けても言えることではない。

「川奈産業の株価が下がるよう協力してくれ、と言われてもお断りだよ。だいたい、あたしになんの得があると言うのさ」

たとえば……、満枝は引き下がらなかつた。川奈産業が不祥事を起こして、軍との取引を打ち切られる事態になったら、どうなります。代わりに取引をすることになる別会社の株が上がることになりませうね。

「まあ、そういうことだね」

では、わたくしが、川奈産業の株価が下がるよう、いろいろとやってみます。先生は、川奈産業の後釜になれるような会社の株を、お買いなさいまし。

「後釜って……たとえば、どこさ？」

富田産業ですわ。

満枝の答えに朱鷺は驚いた。富田産業は、川奈産業と同様、缶詰製造に携わっている。出来て間もない会社だが、着実に力を付けてきた。軍との接触を試みているという噂もある。確かに、川奈産業が軍との取引をうち切られたら、後を請け負うのは富田産業であろう。

なんて娘だ……。朱鷺は舌を巻きつつも面差しには出さず、「まあ、やってみてごらんよ」と言った。

それから数日後、川奈産業の跡取り息子とされた川奈昭三の死体が醜業窟で発見された。新聞でも報じられ騒ぎになったが、それが直接株価に影響を与えたわけではない。この報道をきっかけに、川奈産業が経営不審に陥っていることや、軍との不透明な関係などが次々と暴露された。

果たして、川奈産業は軍との取引を打ち切られ、後釜には富田産業が選ばれた。あらかじめ富田産業の株を買っておいた白瀬朱鷺は、多大な利益を得たのである。

以後、満枝は朱鷺の指導の下、株の売買に手を染めた。最初は小遣い稼ぎ程度の取引だったが、満枝が、父親から受け継いだ遺産を管理する法定後見人の堀田弁護士と共謀を一つ破裂させ、彼女が自由に財産を使えるようになってからは、多くの金をつぎ込むようになり、儲けも莫大な額にのぼった。

儲けた利益を元手に、川奈産業の買収に着手したいと満枝が朱鷺に告げたのが、昭和五年三月である。

川奈産業の株主は、こういう構成になっている。

社長の川奈昭一郎が四〇パーセント。

その一族が二〇パーセント。

二五パーセントは、安定株主である取引銀行。

これら合計八五パーセントの株を取得するのは容易ではない。株を手放すことは、すなわち川奈一族の支配が脅かされることを意味するからだ。持ちかけても、まず売りには出すまい。

となると、狙い目となるのは、雑多な一般株主が所有している一五パーセントである。

「でも、一五パーセントを買ったところで、たいした権利は得られないよ。第一、川奈産業もあの調子じゃ、配当だって出ないだろうしね」

と朱鷺は言った。すると満枝は、微笑んで言った。

「その一五パーセントに、川奈昭一郎様が所有する四〇パーセントを合わせれば、五五パーセントになりますわ」

どうやって川奈社長の株を手に入れるつもりだい？ そう訊ねようとして朱鷺はやめた。

その若さにも似合わず、冷酷で手段を選ばぬ満枝のことだ。穏やかなやり方でないことは確かである。

満枝は続けた。

「先生にお願いしたいのは、わたくしに代わって、その一五パーセントを買っていただきたいということですよ」

「それで？」

「買い終わったところで、富田産業の株が下がるようにいたします。川奈産業の株も多少は上がるでしょう。上がった時点で、わたくしがすべて買い取らせていただきますわ」

ちゃんと、朱鷺の利益になるよう計らっている。小憎らしい娘だ……。

朱鷺はそう思いつつ、承諾した。

経営不振は続き、もはや紙屑同然となっていた川奈産業の株を、朱鷺が買い終えたのが四月。ここで、時間は元に戻る。

富田産業の社長が死体となって醜業窟で発見され、さらに軍に納めた缶詰に不始末があったことが発覚すると、満枝が朱鷺に告げに来た時である。

すなわち、伊集院満枝が川奈産業の株のうち、一五パーセントを所有することは、決まったも同然であった。

「扇屋」を辞した満枝が、いったん家に戻り、再び着替えて外に出たのは夕暮れ前であった。

胸元にリボンをあしらった白いワンピースに赤いカーディガンをひっかけ、膝丈のスカートに白い靴、赤い釣り鐘帽を目深にかぶり、モダンガールふうに装った満枝が向かったのは、鰻屋であった。

当時の鰻屋は、すべて座敷である。玄関で名を告げると、さっそく通された。

「こりやどうも、お嬢さん」

襖を開けると、一人の男がすでに席に着き、鰻重を食べている最中だった。襟の汚れたシャツに縞のズボン、蝶ネクタイをつけた四十前の、見るからに卑しげな面相である。

どうぞごゆっくり、と仲居が去るのを見計らい、満枝は男と向かい合って座った。

「紺野さん」

目の前の鰻重には手をつけず、冷たい面差しで口を開いた。

「もうあなたとは縁を切ったと申し上げたはずですわ」

「つれない言い方は、無しでお願いしますよ」

紺野と呼ばれた男は愛想笑いを浮かべ、もみ手をしながら言った。

「あたしが持ってきた情報のおかげで、ずいぶん儲けなすったはずでしょう？」

「それについては、十分すぎる報酬をお支払いいたしました」

満枝は、突き放すように言った。

紺野は、会社の金を使い込んで解雇された元新聞記者だった。酒と博打が好きな性格が災いしたが、取材の腕は確かで、それを活かして探偵業を開いた矢先、満枝に雇われたのである。

川奈産業や富田産業、他にも満枝が投資した株の会社についての情報を、醜聞も含め数多くもたらしてくれたのは、紺野だった。

その情報は十分に役に立った。川奈産業の株のうち一五パーセントは満枝の手に入ったも同じである。残る川奈昭一郎の持ち株四〇パーセントを手に入れるのに、紺野の力は必要ない。

むしろ、用が済んだ今となっては遠ざけておきたい男だった。

「いや、それがね」

小柄な紺野は、上目遣いで満枝を見た。

「あつと驚くネタが入ったんです」

「どういうネタです」

「気になりますか？」

覗き込むような視線に、満枝は音をたてて舌打ちした。紺野は、写真を取り出した。洋装の女

と、口ひげをはやした好男子がソファに仲良く並んでいる。

「川奈昭一郎の娘の須美子さんですよ」

紺野は説明した。昭三の妹にあたる。一度だけ会ったことがある。東京の女学校に通っている、生意気そうな娘だった。

「で、隣にいるのが、映画俳優の脇谷時彦。まだスタアというわけじゃありませんが、二枚目としてこれから売り出そうとしているみたいですね」

「……で？」

「こいつを手に入れるのは苦労しましたぜ」

「こんなものなんの価値があるのです？」

「へへへ、最後まで聞いてくださいよ。実はこのお二人のランデブーを、後を尾けたんですがね、夜中でき、横浜の待合茶屋にお二人で入っていかれましたぜ」

「関心はございません」

満枝は、写真を紺野の手元に押し返した。

「そうですか……残念だなア」

頭をかきながら、呟いた。

「仕方ねえ、どこか別のところに売り込みますか」

「そうなさって。買ってくださる人が現れるとようございますわね」

「いや、この写真じゃねえんで」

紺野は、笑いを収めて満枝を見た。

「湖南省農民運動視察報告……でしたっけ」

顔色を変える満枝を尻目に、かばんから封筒を取り出し、中身を食卓に並べてみせた。

ガリ版の原紙だった。ガリ版印刷は、パラフィンや樹脂を塗った薄葉紙に、鉄のペンで文字を書く。これを原紙という。この原紙にインクを塗り、白い紙の上に乗せて上から抑えつけると、インクが字の形にじみ出て印刷されるわけだ。普通、原紙は印刷後に破棄される。

満枝が、支那の革命指導者による湖南省で起こった革命運動についての報告書を手に入れ、ガリ版で印刷し、安西小百合にも見せたことはすでに述べた。満枝は、ガリ版屋の主人に通常の倍の金を渡し、原紙はすぐに捨てるよう厳命していた。

だが、破棄したはずの原紙が、なぜか紺野の手元にある。

「それで、あなたはそれをいくらで引き取れ、と？」

満枝の言葉に、紺野は再び顔をほころばせ、そうすな……まず、二千元ほど。普通のサラリーマンの一年半ぶんの収入にあたる。

「わかりました。ただ、今、手元にはございませんの」

「わかっておりやすって」

「明日、同じ時間に、ここに来てください。部屋はわたくしのほうでお取りしておきます」

「承知しました」

「では、わたくし、先に帰らせていただきますわ」

「せっかくの鰻重を、おあがりにならないんですか？」

「今は、そんな気分じゃございませんので」

頭を下げて部屋を出て行く満枝を見送りながら、紺野は満枝のぶんの鰻重に手を伸ばした。

爪楊枝を咥えた紺野が鰻屋から出てきたのは、十数分後であった。

「高慢ちきな小娘だが……しよせんはお嬢だな……」

口に出して呟き、ほくそ笑んだ。

満枝から受け取った多額の報酬の多くはすでに酒と博打に消え、いくらかも残っていない。自分で何でもできると思いきんでいる大金持ちの我が儘娘。地道に探偵業で稼ぐには、あまりにもおしすぎる鴨だった。この先、脅せばいくらでも引き出せるだろう。

まずは前祝いか……。

紺野が向かったのは目抜き通りのキャバレーだった。女給相手に気炎をあげ、店を出たのは夜十時過ぎ。薄暗い横町に入り、さらに暗い路地裏を通り抜け、人けのない通りに出た。そこに一軒の家があり、二階で賭場が開かれているはずだった。

「変だな」

家の前に立った紺野は呟いた。二階に灯りがついていない。その灯りが、賭場が開かれている合図なのだが……。

「どなたもいらっしやいませんか」

背後で声が出た。ぎよつとして振り向いた。

「あ……!!」

紺野は眼を見開いた。目の前に立っていたのは、伊集院満枝だった。

「一時間ほど前、警察の捜査が入ると電報を入れておきました。みなさん、お店を畳んで、どこかに行ってしまわれましてよ」

月明かりに、薄ら笑いが浮かび上がった。瞬きもせず、澄んだ瞳がじつと紺野を射抜くように見据えている。思わず後ずさりしそうになったが、なんとか踏みとどまって笑みを作った。

「お嬢さん、冗談はいけませんよ。いったい何の真似で……」

次の瞬間、すっと寄ってきた満枝が、鞆丸を膝で蹴り上げた。

すさまじい激痛に紺野のからだは一瞬硬直し、膝が崩れ落ち、路上に突っ伏した。続いて、後頭部に衝撃。意識が弾け飛んだ。

「馬鹿な男……」

ハンドバッグから縄を取り出し、俯せに失神した紺野の両腕を背中に回して縛り上げながら、満枝は呟いた。仰向けにして、丸めた布を口に押し込み、猿ぐつわを噛ませる。

「起きなさい」

一つ二つ、紺野の顔に平手打ちを喰わせた。紺野は呻き、わずかに瞼を上げた。身を振るうとして縛られていることに気づき、眼を見開く。

満枝は、その股間に拳を振り下ろした。急所を直撃され、紺野はのけぞり、苦しげに痙攣した。悲鳴は猿ぐつわに押し潰されて呻きにしかならなかったが、激痛と嘔吐に苛まれ、眼から滝のように涙が迸った。

「最初からこうしておけばよかったのね」

満足げに微笑み、さらに拳を打ち下ろす。

芋虫のように背を丸め、地面を転げ回って悶える紺野の姿を見ながら、満枝はシガレットを取り出して火を点け、皓々と月が輝く夜空に煙を吹き上げた。

やがて紺野は、ぐったりと動かなくなった。激痛が続いていることは、全身の細かな震えや、猿ぐつわから漏れる喘ぎで見て取れた。

満枝はシガレットを投げ捨て、紺野に歩み寄った。苦痛と怯えの混じった眼で見上げる紺野に、満枝は告げた。

「これから、あなたを去勢します」

紺野の眼が見開いた。

「わかりますね……あなたの鞆丸を、二つとも破裂させます」

紺野が激しく身を振った。声にならぬ悲鳴を漏らし、なんとか後ずさりしようと藻掻く。満枝はその股間に踵を乗せた。

紺野の面差しが、懇願するように歪んだ。満枝は静かに笑って言った。

「あなたが裏切ったから、そうするわけじゃないのよ……わたくしはただ、そうしたいの」

そのまま一気に体重を乗せた。満枝の踵の下で、鞆丸が平たく変形し、やがて肉の弾ける音とともに、陰囊の内部に飛び散った。続けて、もう一つの鞆丸に踵を乗せる。こちらもある破綻した。動かなくなった紺野の猿ぐつわを取り、手を縛っていた縄をほどく。白眼を剥き、凄まじい形相であった。ズボンの股間に赤い染みができ、みるみる拡がっていく。破裂した鞆丸は、その勢

いで陰囊をも突き破ったようだった。

瀕死の紺野の傍らで、満枝は両腕で己がからだを抱きしめ、地面に膝をついて俯いていた。肩が大きく上下している。

からだの奥からこみあげてくる何かを、必死で抑えつけているようだった。

「まだよ……」

満枝は喘いだ。

「どうしても今夜のうちに……もうひとり……」

狭い平屋が雑然と並ぶ界隈は、盛り場とは違い、夜が早い。すでにしんと寝静まり、明かりを点している家もない。

「印刷 承ります」と墨書した看板を掲げた、傾いた家の前に伊集院満枝は立っていた。「湖南省農民運動視察報告」を刷らせた、五十過ぎの独り者が細々と営んでいる印刷所である。

ガラスを貼った格子戸の前に立ち、ハンドバッグからナイフを取り出した。工業用ダイヤモンドを仕込んだナイフで、音をたてぬようガラスを丸く刳り貫く。さらに細引きで格子を切り、開いた穴から手を差し込み、内側の錠を外した。

静かに格子戸を開け、狭い三和土をあがると、謄写版印刷機や原紙の束が散らかった仕事場となっており、襖ひとつ隔てて四畳半の部屋がある。襖を開けると、ちゃぶ台と小さな箆筒がひとつの寒々しい部屋に煎餅布団が敷かれ、頭のはげ上がった五十男が夜着の胸をはだけて寝ていた。満枝はバッグから蠟燭を取り出し、火を点して部屋の隅のちゃぶ台に置いた。肋骨の浮いた薄い胸板と、汚れた禪に覆われた盛り上がり方が照らし出される。

男の顔が、眩しげに歪み、やがて眼を開いた。しばらく視線を彷徨わせていたが、枕元に座っている満枝に気づき、あっと小さく叫んで身を起こした。

「あ、あなたは……何時の間に……?」

狼狽える男の鼻先に、原紙の束が突きつけられた。男は目をこすりながら原紙を広げた。やがて事態に気づき、強張った面差して満枝を見た。

満枝は、薄ら笑いを浮かべている。

「こ、これには……わ、わけが……」

「うかがうわ」

満枝は答えた。

「お話しになって」

「も、申し訳ない!」

男は布団の上で土下座した。

「じ、実は……独り娘が……病を患って……」

「あなたに、ご家族がいらしたの?」

「わ、別れた女房が……岩手にいまして……で、娘が急病で、金が要ると手紙で泣きつかれたもんで……それで、つい……」

「本当なの?」

「本当です。信じてください」

男は顔をあげ、涙を浮かべて懇願した。

「六つの時に別れて、今はもう十七のはず……なんとかしてやりたくても金はねえし……そこに、あの男が現れて、大金を支払うからと……それでつい、魔が差しまして……」

「それが本当かどうか、確かめたいわ」

満枝は、バッグから手帖と鉛筆を取り出して男に差し出した。

「娘さんの名前と、住んでいる所番地を書いてください」

「へ、へい……」

男は震える手で書き付け、頭を下げて両手を伸ばし、手帖を満枝に返した。

「岩手県胆沢郡水沢町……そう、わかったわ」

書かれた住所を一瞥してから手帖を畳んでバッグに戻し、奥底から何かを取り出した。

「本当に申し訳ございませんでした」

男は再び、蜘蛛のように平伏した。

「二度と致しません。勘弁してください」

「嫌よ」

冷やかな満枝の声に、男は顔をあげた。その顔に、満枝は思いきり、右の拳を叩きつけた。拳には、蜜柑ほどの大きさの石が握られていた。こめかみに打ち込まれ、男は昏倒し、横倒しに倒れた。

満枝は、気絶した男を仰向けに寝かせ、腹から顔にかけて掛布団で覆った。男の腹のあたりに腰かけ、左手で男の口のあたりを押さえつけ、右手を伸ばして股間を握った。

布団の下で男が痙攣した。布団に覆われた口から呻きが漏れた。

「安心なさって」

激痛に意識を取り戻し、なんとか逃れようと藻掻く男を抑えつけ、鞆丸を握る手に力をこめながら、満枝は言った。

「娘さんには、あたくしが十分な援助をさせていたたくわ。心安らかに旅立ちなさい」

やがて満枝の右の掌の内側で肉塊が弾け、破壊された生殖器を包む禪が見る見る赤く染まった。男は大きくのけぞり、そのまま動かなくなった。

満枝は立ち上がった。全身が震えていた。眼が見開かれ、唇は悦びに引き裂かれている。

左の手が胸乳へ、右の手がスカートの内側へと伸びた。

沸き上がる官能を解き放ち、恍惚の時を貪る満枝の傍らで、去勢された哀れな肉体が、地獄の苦しみに苛まれながら、最期の時を迎えようとしていた。